

青島日本人学校への派遣を振り返って

下関市立向井小学校 教諭 澤田 ちひろ

(平成 24 年度派遣 中国 青島日本人学校)

1. 青島日本人学校について

所在地 : 中国山東省青島市

児童生徒数 : 小・中学部合わせて80～100名。

開校の経緯 : 補習授業校を経て 2004 年に開校。児童生徒数の増加に伴い校舎を建設。
2008 年より新校舎の使用を開始。

きれいな校舎に人工芝の運動場、自然エネルギーを利用した空調設備、冷暖房完備の体育館やプールなどの素晴らしい施設がありました。警備や清掃の中国人スタッフがとても親切で子ども達からも好かれていました。

登下校はスクールバスを利用する児童生徒が多く、定期的に教職員も乗り、安全指導を行っていました。児童生徒数に対して大人の目が多く、子ども達一人ひとりをよく見て、指導する環境が整っていました。



正門から見た青島日本人学校
(左) → 24 時間体制で警備しています。

校舎中庭の壁面に描かれた校舎
と満開の桜 (右)

2. 子ども達の校外での様子

習いごとをしている児童が多かったです。サッカー・スイミング・テニスなどの運動系や、バレエ・絵画・ピアノなどの芸術系がありました。バドミントン・カンフー・テコンドー・書道など、青島ならではの習い事に通う児童もいました。

四季がはっきりしている青島では季節にちなんだ行事も多く、桜が満開の公園での花見、日本人会主催の夏祭りや新年会などがありました。

学校生活はもちろんですが、それ以外の時間も充実して過ごしている様子が見られました。日本人も多く住む住宅街では、芝生の中庭で日本と同じようにボールを追いかけて元気に遊ぶ子どもの姿も見られました。日本に住む子どもに比べて「運動量が少なくなるのでは」という心配をもっていました。学校でも運動量を確保するプログラムを実施しており、校外でも体を動かす環境が整っていました。

3. 海外で「児童生徒の命を守る」ということ～反日デモを経て～

「日本と同様の教育を子ども達に」という信念で教育活動にあたっていましたが、学校を取り巻く状況は日本と同じというわけにはいきません。日中関係の悪化に伴い、日本のニュースでも大きく取り上げられた反日デモが起きました。青島には領事館があり在青島日本人の多くは領事館からの連絡メールに登録しています。有事の際には緊急メール

が入ります。無残に壊された日系スーパーやデモに向かう人々の長い列・・・日本人学校は休校しました。教育委員会はありませんので、校長や理事会、領事館で話し合っただけの対応です。子ども達の命が最優先で、何が正解か分からない責任の重い決定です。

反日デモ以外にも、近隣の方からのクレーム（電話や投書）、物の投げ込み、落書き放火など、日本では想像もできないようなことが次から次に起きました。それらに対応する中で、いちばん大切なのはもちろん児童生徒の命です。そして、普段どんなに楽しく平和に暮らしていたとしても「ここは日本ではない」という意識を常にもつことではないでしょうか。

派遣を経て、危機意識の持ち方に変化がありました。「あらゆる場合を想定して」「子ども達の命を最優先に」という意識が高まったのではないかと感じています。

4. 授業研究について

日本人学校での業務は、提出書類・出張がないため、子どもと接している時間以外のほとんどを教材研究にあてることが可能です。また中学部の先生にも気軽に相談できるので、専門性の高い知識もすぐに得られ、深い教材研究ができる環境でした。

また、自分の専門教科で中学部の生徒に教える機会をもてたことで、実感をもって小中の教科のつながりを見通すことができました。このことは、現在の授業に特に生きています。

「日本を知ろう、中国を知ろう」をテーマに3年間を通じた授業研究を行いました。和装や三味線などの自分の趣味を生かし、また保護者の中国人の方にも協力していただき、中国茶や二胡、太極拳など、児童とともにたくさんの日中の伝統文化に触れることができました。

5. 帰国後の授業や生活に経験を生かす



交流会の様子（左）とマダガスカル遊び「クパーラ」（右）（JICA 二本松 HP より）

JICA 二本松で開催された「ふくしまグローバル人材育成指導者セミナー」で派遣の経験を話す機会をいただき、たくさんの方と交流することができました。校内では、学級や学年単位で経験をもとに話して総合学習の内容が広がったり、国際理解教育を担当することで、直接担任していない子ども達にも世界の状況を伝える機会を得ることができたりと、派遣前には考えられなかった分野の経験を生かして働くことができています。昨年度からはSDGsに関する総合学習のプログラムを組んで実践しています。今後も派遣の経験を生かし、グローバル人材の育成も視野に日々の授業に取り組んでいきます。

シンガポールの科学技術教育～中学校～

シニア派遣 石川 友一

シンガポール日本人学校(2013～2016)

はじめに

国の存続のために各国がしのぎを削っていることは、日々のニュースで実感させられているところである。政権を司っているところでは、国民の幸せと国家の安全を内的にまた外的にも気を配り、国を維持していると言うことが大略であろう。しかし、国家の安全も国民の安心感も一時的なものでなく、将来にわたって存続させなくてはならない。そのためには、時々刻々と変わる世界情勢や物流の動き、人の動きや関心の変化を把握しそれぞれに新たな対応を考え政策を立案し実行しなくてはならない。国家として現在に対してそして未来を見据えての対応が求められる。しかもそれをなすのは人間である。未来を見通す勝れた才能をもつ人も大切だが、その未来を支える技術を持った人も必要である。

未来を支える技術をもった人材を育て、国の存続に力を入れているのがシンガポールである。特に最近明確にそれを示しているのが中学校段階で、すでに未来社会を支える専門的な人材を育成しようとしていることである。彼等は若干 13 才という多感で好奇心旺盛な時期に未来社会を創造し生きる技術を身につけていくのである。そのような人材がいる国民が魅力にあふれているように見えてくるのは、シンガポール国自体よりむしろ他の国々であろう。資本をシンガポールに投資する動機となる。他の国の事業家は、自国では実現が不可能な事業をシンガポールでならできると考えるのは当然のことであろう。それがまた、シンガポール国の作戦でもある。海外からの新たな事業は国民の働く場を与え、生活の安定化をもたらす。また、港湾を利用した運輸業はシンガポールの伝統産業で産業の継続を図ることもできる。こうした人材育成を世界に発信することで、将来にわたり海外からの資本を取り入れ安定した経済と大国（中国、インド、マレーシア、それにイギリスも考慮に入れてもいいだろう）の民族で構成された多民族国家であるということからの安全性確保も加わり、バランス感覚の鋭い国家運営を余儀なくされ、それを実施し続けることが運命づけられているのがシンガポール国なのである。

こうした未来社会での技術者を養成する中学校がシンガポールには 8 校あるが、その中でも最難関である科学技術学校（SST）において、国の存続のかかる科学技術系人材育成が生徒の未来への安心感と優越感を生かし図られているシステムを考察してみよう。

1 SST (SCHOOL OF SCIENCE AND TECHNOLOGY) の概観

私が SST を訪問したのは 2013 年 8 月 29 日木曜日、到着したのは朝 10 時前であった。私の家から学校まで通う道路沿いにあったにもかかわらず、学校らしいと言うことは認識していたが、そんな優秀な人材を集めて教育をしている機関とはついぞ気付かないで通り過ぎていた。その日はコンドミニアム（マンション）下のバス停から乗り換え場所のクレメンティ入り口で下車し、そこから歩いて SST に向かった。普段は朝の 6 時半頃、この停留所から日本人学校方面に走っているバスに乗り換える。しかし、今朝、この場に立った時には、すでにシンガポールの日差しは強くなっていて歩くことが苦になる時間帯になっていた。

こんな時はさらに進んでバスターミナルのあるクレメンティモールまで行き、近くのホーカーで冷たいサトウキビジュースを飲むと元気になるんだが、と思った。

集合時刻の10時になると日本人学校クレメンティ校の先生方も集まってきた。係りの教員以外は、なぜこの学校に連れてこられたのか理由が分からなかった。理由は職員会議の時に伝えられていたかもしれないが、研修する強い意欲がわくような話ではなかったのだろう。

SSTの若い校長が玄関まで迎えに来てくれて、あらかじめ準備してあったいすに全員座り、写真撮影がはじまった。学校を後にするころには、私たち一人ひとりに記念の写真をお渡しすることができるということであった。また、学校のブログに掲載したいといわれ、皆、承諾した。ブログに載ると言うことは評価されるということだから、気の抜けた研修にならないよう緊張が走った。

研修室に通されると、やる気にあふれた校長が学校説明をされた。それによると、SSTは2008年に創立が発表された国立の理科と技術に特化した大学進学を目指す生徒のための4年制学校である。教育省がシンガポールの未来を担う人材を育成するために先見性と人材育成に優れた校長を選抜し、新技術の習得に企業の協力を取り入れ、機材を配備し、また新技術をもち、進取の気持ちにあふれた教員を配置した。カリキュラムと教育はこれまでの技術学校のカリキュラムとは一線を画した全く斬新なカリキュラムを編成し、南洋工科大学とこれまで技術教育を担ってきたニー・アン・技術学校の教育推進上の協力も得るも約束もできている。ここに生徒達の大学入学までの進路の確保が保障された。

SSTで学ぼうと思う生徒は、学校の行なう検査試験を受け、その中から選ばれるということであった。シンガポールには小学校を卒業するにあたりPSLEと呼ばれる試験があり、この試験で良い成績を取ることが未来へ続く進学の好条件を生み出すとされている。そうした伝統的な進学コースから外れたSSTへのコースは児童や保護者に理解が難しかったのではないか。創立を前にして、校長やスタッフは小学校を訪れ、SSTからのコースも大学に続いていることや外国の学校でも研修を行ない世界的な視野で学習が続けられることなどを保護者に説明し、新築の学校に招待し学校案内、児童には模擬授業を体験してもらい興味付けを行なったという。こうした努力によって2010年やっと200人の新入生を迎え開校にこぎ着けた。毎年受験生は1300人から1500人とのことである。この中から200人が選抜される。私が訪問した2013年には800人の生徒が在学していたことになる。

一学級は20人ないし23人、男女共学少人数で教育が行なわれている。検査試験はPSLE以前に行ない、学力だけでなく、発想力、想像力、交渉力、問題解決力、他者の意見に耳を傾ける力も考慮するという。そのため試験にインタビューやグループ討論、共同作業も取り入れている。これも新たな時代の新たな社会でリーダーとして活躍できる人材を育てるための選考の仕方なのであろう。

2 シンガポール共和国が生き残りをかけた理工系人材の育成

資源のないシンガポールがこの先、国を保つためには、近隣諸国との友好関係と外国資本の受け入れ、そして国内資本の海外投資である。これらのことを現在は、行政府と政府系企業が取り仕切っている。執行している人々の多くは、シンガポールの学校教育制度のエリートコースを歩んだ人達である。シンガポールは国が行なう試験に優秀な成績を納

める人こそがこの国を繁栄させ、永続させられると信じている。それで、小学校卒業時、中学校卒業時、高校卒業時の振り分け試験をやめようとはしない。そして、国立シンガポール大学で専門教育に入り、卒業すると国家の存亡を担うポジションにつき、明日のシンガポールを夢描き、国家の存続と繁栄という仕事にのめり込んでいくのである。

しかし、2008年3月4日、議会で教育大臣ターマン・シャンムグラトナムが「教育の多様性を持たせるために、国立の特別学校 SST を設立させる。」と報告した。これまでのシンガポールの科学・技能教育のあり方では、新社会での、この分野のリーダーが育ち難いとされたのである。これまでの制度では、振り分け試験で良い成績が得られず、奇しくも早期に技術系の学校に振り分けられた人達が多くこの分野を担ってきたので、意欲的な取り組みや発展性が見込めない状態であった。物を売り、物を作り、物を直す等に従事するに留まり、よりよく、意欲を持ってさらに違う物を違うやり方で作り出すという態度や思考が育ちにくいという現実があった。

現在のシンガポールを維持するにはこの形で十分であるが、忍び寄る情報化社会では、この分野の人材に期待される能力は高度なものが求められる。シンガポールは「現代の社会を発展させ、未来社会を模索する能力」を育てることに組み込むことにした。それを情報・生命科学・電子・商業活動の分野で探求し、「思考し、改革し、新たな産業を創造する」人を育てようとした。SST は「25 人以下で ICT 基盤を教えることで、メディア、バイオ、電気、デザイン学のような応用学科に生かし」、情報・生命・電子・商業の分野で最先端の基礎と応用を学ぶ学校である。そして、こうした人材は外国企業にも魅力的に映り、外資系企業の呼び込み資源となる。外資系企業が来てくれれば、国民の仕事は確保され生活の憂いは少なくなり、国家は税金が十分入り存続できるのである。

シンガポールにはジュロニーストという工業団地がある。給水・排水・配電等工場建設に必要な基礎基盤はできあがっている。企業は適切な場所を選び工場を建設すれば良いだけである。外国資本の百貨店やスーパーもたくさんある。日本の百貨店では、高島屋や伊勢丹が他の国の百貨店と鏑（しのぎ）を削っている。大阪大将や牛角などの飲食業もシンガポールに出店している。

SST は、国家の未来を担う人材育成を求められ生まれた学校である。ICT の技術を持ちこれからの社会に必要な高度な知識と進取の精神を持った人材。それは、多国の企業人からも求められる人材である。資源のないシンガポールでは自国独自の企業の可能性は限られる。

【バイオ学習室の実験器具の一部】



多くの外国からの企業の誘致の方が安価で即効性がある。土地と人材を提供して、彼等の給料から税金を徴することができれば、それを公共事業に投資し、国民を幸せにすることができるという循環型のシナリオである。

「シンガポールは人材こそ資源、一人の人も無駄にしない」と豪語して教育制度改革に取り組んだのである。

3 2言語教育は外せない

高度な科学技術を獲得しているだけでは、生かす範囲が限られ、また逆に知識や技能を発展させることも限られてくる。そこで、小学校課程で行なわれていた英語教育を継続し、また、母語教育も継続させる。この2言語教育政策はシンガポール教育の伝統である。ただこの政策のために「振り分け」を行い、振り分けられた子ども達とその家族に優越感と劣等感を抱えさせてきた。大学進学コースから外れた子ども達が学習への関心や就業への意欲がなくなっていくことが問題となり、「人材こそ資源だ。一人も無駄にしない。」という政府のスローガンを元に教育改革が行なわれた背景は前に述べた。しかし、2言語教育は小・中学校教育から外されることはなかったし、PSLE・GCE（小・中卒業試験）の科目からはずされることもなかった。

PSLE（小学校卒業試験）以前に生徒の入学試験を行なう SST でも語学教育は例外ではない。科学・技術に特化した教育を推進する SST でも2言語教育を推進する。2言語教育は子ども達に優位に働き、国の力にもなると生徒自身の利益をまず主張するが、その実国家の存続がかかっていることは国家の運営者が熟知していることなのである。

まず、英語は今日のシンガポールを建国するにあたり大変重要な共通語として働いた。異文化間の人々とのコミュニケーションを促し、インターネット・科学・技術・世界経済の動向などの知識でシンガポールの安全と経済活動に影響を与えた。シンガポールで一般に話されている英語にはシンガポール独特の発音と表現がある。「シングリッシュ」とシンガポールの人は言っている。例えば、「あなたは水道管が直せますか。」と聞くと、出来る場合は「カン、カン (CAN)」と答え、出来ない場合は「カント (CAN' T)」と答える。だから、シンガポールでは、これからも正確な表現と発音を修得する英語教育を進める。この施策は小学校から行なわれている。

母語教育、これも小学校から行なわれている。シンガポールにはマレー・インド・中国語を母語として話す人がたくさん暮らしている。生徒の家庭の多くはこれらの国の出身者で、家庭では母語が使われてきた。しかし、近年は英語の修得のために多くの家庭で英語が利用され、子ども達の中には母語を話すことができない子どももでてきた。実際、初代首相のリー・クワンユーも人種は中国人だが、中国語は話せなくて60歳を過ぎてから本格的に北京語を勉強したという。それは、鄧小平と直接話すためであったという。母語も生徒自身のためと国家にとって有用であるという面で教育の対象になっている。「母語は、考えたり、計画したり、創造したり、情報を交換できたりと、とても有効な言語である。」また、「他の文化と結びつき、外国の人々の見方から議論をしたりすることもできるという支えにもなる。」また、「情報交換に便利で、社会的に結びつき、文化交流や仕事もできる。」そして、「インドや中国のような経済成長著しい国々の経済的パワーは生徒の学習する良い材料となり、

刺激になる。母語は、未来においてこれらの国の人々と仕事をするときに大いに役立つであろう。」と、SST は生徒個人の未来に有効に生かせ、生徒の活躍はシンガポールのためになると考え教育課程に取り入れている。SST の「21 世紀に必要な能力」の中の「社会性」に「コミュニケーション技能」を位置づけている。

2カ国語が読み書きできる人々は多国籍企業にとっても魅力である。シンガポールで起業すれば、英語で意志を通じ、販路として中国、インド、マレーシア、インドネシアに拡大することができるのである。しかし、SST が2カ国語の習得を目指すのは、以上のことだけでなく大学への進学も可能となるような配慮である。

4 個性の伸長と国民教育

未来国家と市民をめざして、国家の存続と個人の成功のためには未来へつながる技能の熟練と技能を扱うに関わる倫理が必要である。自己を顧みて、「自己に目覚めそして自己を制御できる能力を育て、自己実現と公共善のために努めるシンガポール人」が望まれる。

【職員室に飾られているアインシュタイン】



それは個人としては、「批判的・創造的思索家であり、積極的実現を目指す改善者」でもある。また、「企業家精神をもったダイナミックなリーダー」になることも求められている。そうして、「地域や世界で活躍する市民」となるという構想がなされているのである。そのために次のような教育に力を入れている。

4-1) 性格教育

教育は個としての存在の有り様の理想を育てる作業である。それは、身体であり心のありようであり、生きる術の伝授である。SST では「男女の人生で、道徳的勇気を持って正しい行いをなし、正しい判断ができる人を育てる。」それには「社会的情緒が安定している必要がある。個人は社会の中で自己実現を果たす。社会情緒は、個人的制御と人間関係における情緒の制御が必要」である。しかし、それらは自己の安全のためだけの制御であるだけに留まらず自己実現のために「リーダーシップ」的な発想に基づいた自分を生かす制御でなければならないし、もちろん「性に対応」した制御もなされなくてはならない。また、自己の性格は死ぬまで追求されなければならないので、自己を顧み、学び続ける意欲と職業に対し真

摯に研究し続ける精神を持ち続けなければならない。このような性格をもった人が教育により育成できると考え教育課程に組み込んでいる。

4-2) リーダーシップ教育

リーダーシップがある人とは、「社会に明るい刺激をつくることができる、ダイナミックで物静かで倫理的な人である。」このような人も教育によって育てられるという仮説で教育に取り組んでいる。SSTは科学と技能分野でシンガポールを牽引する人材を育てることを目的にしている。リーダーを育てる教育を意図的・計画的にカリキュラムの中で設定し実施しているのである。リーダーになる人は、「性格が良い。社会的にバランスが良く、感情を左右できる技術を持っている。普遍的なモラルの保持者である。自己意識と克己（自己制御）と社会的意識と人間関係管理、責任感をもっている。」これらの内容を、教育をとおして育てようというのである。

具体的にはそのために、リーダーシップを取る機会と教育で構成されている「Youth Service Program」をSSTのカリキュラムに取り入れた。それは、多民族国家を継続する最低条件である良い市民になることが必要で、「違った年齢、民族、社会文化を持つ人々と出会い、一緒に働くことができる人」づくりである。SSTが「21世紀に必要な能力」の中に「異文化理解」を位置づけているのもそのためである。多民族国家のシンガポールでは、異民族との共存共栄が個人の生きる道を作ってくれるし、国家の安定発展にもつながるのである。それで、「交差する文化を理解する。」国内にありながら同じシンガポール人でありながら、他民族間の結びつきが希薄なシンガポールでは、異民族との結びつきの強化が小学校から意識的・計画的になされる。次に「偏りのない合理的・効果的な調和」が必要である。民族として尊重され、同じ権利を持って生活が保障されなければならない。これらの実現のためには「コミュニケーション技術の習得」が不可避となる。言語・文化・社会情緒・個人制御の理解と技術が体験を通して教育される。



【売店の食堂も多民族に開かれている】

4-3) 市民教育と国民教育

ボーダレスな社会が生まれようとしている今日、その流れの中で国家を守れない状況が

生まれてくる可能性は大きい。自己実現のための教育、それは国家が経済面で存続するための教育につながっていたが、意識面での認識は抜け落ちていた。そこで、経済面だけの継続ではなく、愛国心の醸成も含めた国民教育が必要であることに気付いた。それには自分がどこに所属しているかという所属の明確な意識を持たせることが重要である。「学校の生徒としての意識、生活する地域の住民としての意識、そして国家に所属している」ということをしっかり意識し確認することである。それには、自己実現が学校、地域、国家のためになる、という相互不可分の精神の教育が必要となる。未来を見通して、SSTは「今日と未来に通用する性質と価値を心に持つ市民とネット住民を育てよう」としている。また、国際市民精神プログラム（GCP）を取り入れ、「この地球を分かち人々と同じ心を持ち、世界を維持する正義に貢献する活動をすすんでする」ような教育を自己実現と国家存続に関わる教育の中で交差させ、育てようとしている。学習目標としては、「世界に明るい変化を与える」リーダーシップ教育から拡張された目標である。

シンガポールにとって世界とは、主に ASEAN 諸国で、これらの国の異文化理解を重要視している。

このような教育に始終しては、シンガポール自身の利害と発展を意識的に取り組もうとするシンガポール人は育たない。「シンガポールを信じ、シンガポール人に関する問題を強く語る共同体を育てる」「シンガポールにルーツを持つというシンガポールに所属するという感覚を育てる」ことを目指して国民教育を学校教育の中で行なおうというのである。

それには、まず学校と国家に誇りを持たせなければならない、シンガポールが直面する色々な問題解決の機会や変化に目を向け、その解決を生徒自らも考える。また、市民教育や異文化理解教育の中での体験活動を生かして国民感覚を育てている。

4-4) ネット住民精神教育

聞き慣れない教育であるが、情報化社会に生きるに当たって必要な精神を育てる教育と考えているのだろう。現代の社会は必ず、ネット社会に変貌する。サイバー環境の中で人々がそれを生かした幸福な社会生活を送ることができるよう、またさらに高い生活へ誘うことができるような指導的な精神を持つことが生徒に求められている。生徒は自分だけがサイバー環境に適合して良い生活を送るのではなく、国民が享受できるよう責任をもって取り組む義務感を持つことが必要とされる。

そのために生徒は、ネット社会で生きる技能だけでなくネット社会での自他の尊厳や安全と責任ある情報管理と発信できる道徳心を養わなくてはならない。「親切・尊敬・熟考」を機会あるごとに体感し習慣化するようにするよう教育全体で取り組んでいる。

まとめ

シンガポールの国土は日本の東京都程度であるが、国を構成する民族は主に4人種の多民族国家で、生活文化が異なる民族が一つの統一した国を存続させることは容易なことではない。しかし、シンガポールは2015年に国家創立50周年の式典を行なった。記念式典で「シンガポールの国民は、シンガポール人だ。」と声高に叫んでいた。それは、国民一人ひとりが50年間の繁栄を築いたという誇りを感じているからであろう。しかし、シンガポールは立ち止まっては居られない。

近隣のマレーシア、インドネシアはいずれも歴史的にはシンガポールを領土としていた時代があるのだ。かれらは現時点ではシンガポールに歴史的事実を突きつけ積極的に交渉に当たる余裕はない。まず、自国の国民の生活水準を上げることが最重要で、そのための資本を必要としている。それを提供してくれるのがシンガポールでもある。関係を荒立てるより資本を投資してもらう方が良い。それはシンガポールも同じである。大国にプレッシャーを与え、藪をつついて蛇を出すようなことになれば、国は内乱状態になり、たちまち国家は滅びてしまう。それは、シンガポール国を構成する人種にマレー人がいるからだ。また、彼等の多くはイスラム教徒でもある。後者が先導に立つようにでもなれば、事はさらに大きくなり崩壊も早まるであろう。インド人、中国人もしかりである。だから、シンガポールの学校はASEAN重視の国際理解教育を行なっている。まず2言語教育が上げられる。母語と英語で外交を維持しようというのである。シンガポールが港湾事業で成功したことからの知恵であろう。

また、2言語主義は外国資本を呼び寄せる格好の宣伝となる。シンガポールの資源は人材である。彼等は言葉を器用に使うので事業を行なうには最適な国民である。シンガポールにとっては、国民を雇用してもらい生活の安定と税金から国家の経済安定にもつながる。今日の繁栄は主にこの点と雇用賃金の関係で成りたっている。

この政策がこの後も続くとは考えにくい。未来社会を目指した、必要とされる人材を育てなければならぬだろう。シンガポール国が描く未来社会は、サイバー環境の中で生活し事業が行なわれると想定し、インターネット社会で自由自在に生活し、かつさらに勝れた物を創造できる人材が活躍する、そうした人材が育つ教育を目指している。この項で揚げた SST 等の学校がそれを引き受けている。取り組みは浅いが、これから成果が現れてくるであろう。

SST 等で働く教師は、シンガポール内の教師のアイデアだけでなく、英語を駆使して世界中の教育研究機関と教師に結びつき、教育の研究を行なっている。それも、インターネットでだけでなく、実際に関心をもった国に行って実践を見たり、話を聞いたりするのだ。こうした努力により生徒はさらに新たに広い視野に立った的確な教育を受けることができるようになっている。

シンガポールの国家の維持繁栄の挑戦は、これだけに留まらない。多くの国からの人々の到来により、シンガポール国の人口を増加させ、そして優れたシンガポール人、彼等はシンガポーリアンと自称する、を育て、さらなる発展と貢献をしようとしている。シンガポールから目が離せない。

資料 1 SST のプログラムの枠

VISION : 科学技術の広い結びつきを研究する専門学校

MISSIN : 技術革新と応用学問を通して、現世界の発展に寄与し未来を展望するリーダーの育成

VULUES : 最良を目指し、自立した社会を築き、学問のネットワークを拡大させる。

GOOLS : SST の生徒は、考える人、改革者、起業家

資料2 カリキュラム構成

2-1 中心となる構成要素

21 世紀の能力と性質	情報コミュニケーション技術	学際的研究学習	革新と企業精神
<ul style="list-style-type: none"> ・活動 ・目的意識を持った共同体 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習者中心 ・適切 	<ul style="list-style-type: none"> ・本物 ・統合 	<ul style="list-style-type: none"> ・過程の重視

2-2 21 世紀の学びの成果

知性	対人（社会）関係	個人（情緒）面
<ul style="list-style-type: none"> ・批判的思考 ・創造性 ・好奇心 	<ul style="list-style-type: none"> ・共働力 ・コミュニケーション能力 ・市民としての義務 ・異文化理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼 ・責任 ・勇気

参考資料

学校要覧『SCHOOL OF SCIENCE AND TECHNOLOGY SINGAPORE』

『SHAPING FUTURE INNOVATORS THE SST WAY』

『物語 シンガポールの歴史』

『リー・クアンユー 未来への提言』